

平成30年7月11日(水)

老球の細道425号

デニス・ロッドマンのリバウンド伝説

会津バスケットボール協会 室井 富仁

先月米朝首脳会談が行われる前にシンガポールに突然元NBAのスーパースター、デニス・ロッドマンが現われた。NBAの大ファンでもあり、自らバスケットボールをプレイしていた金正恩の友人という立場で何らかの形で役に立とうとしていたようだ。

デニス・ロッドマンは現役時代、異端児、奇想天外、ワル、野獣・・・など、さまざまな見方をされた選手であった。コート内でも、コート外でも、いつも期待通りに何かをやらかしてくれ、絶対にファンをあきさせなかった。

彼の選手としての真骨頂はリバウンドである。NBA史上最高のリバウンド王の称号を持ち、数々のリバウンド記録を打ち立てた。「ボールの匂いがする」と言い放ち、常に攻防共にリバウンドにからんでいる姿は今でも忘れられない。会津高校時代のO君や坂下高校時代のW君なども身長は大きくなかったが、その風貌とリバウンドへの抜群の仕事ぶりから「ロッドマン」の称号を与えていたことを思い出す。

ロッドマンのリバウンドの凄さは次の3点にあった。

①シュートのはずれたところ、落ちるところに必ずいる：相手だろうが味方であろうが、シュートが放たれると必ずリバウンドに行く。相手のスクリーンアウトで体をぶつけられ、リバウンドに間に合わないような時でも、わずか1%でも可能性があれば、いかなる状況にあってもゴールへ向かい、ボールを奪おうとする。また、味方が放ったシュートがバスケットに入った時も、そのボールをさわってゴール下方向へテイクアップしている。ディフェンスリバウンドのときは、何回もボールをテイクアップし、取れるまでジャンプしている。

②常に100%以上の力でリバウンドに飛び込む：2ケタのリバウンド数になれば、もう十分といえるのに、20のリバウンドをとっても満足しない。リバウンドを何個奪取しようとも、最後のブザーが鳴り響くまで、リバウンドにダッシュする力は休まることがない。

③人が嫌がる仕事を平然とこなす：リバウンド、ルーズボールを取ることは汚れ役で、チームの縁の下の力持ち仕事である。多くの人が好んで取り組んだり、楽しんだり、自分の体を張ってまでやろうとはしない。必ず人とぶつかるので、痛いのは当たり前、ケガの恐怖との葛藤もあるが、彼は好んでやる。

バスケット男子日本代表がW杯アジア1次予選でオーストラリアにアップセットを起こした勝因はディフェンスリバウンドであった。ファジーカス、八村の加入によりリバウンドが強化され、相手のセカンドチャンスを少なくすることができたからである。

ロッドマンの存在が注目されたことで、新たにリバウンドの重要性を再認識した。「リバウンドを制するチームはゲームを制する」。勝てそうで負けてしまったゲーム、負けそうで勝てたゲーム(アップセット)は、だいたいリバウンドが原因である。普段の練習からリバウンドまで真剣に争う練習をしているチームがどれくらいあるだろうか。

コーチの仕事は、選手がリバウンドに飛びつく習慣をつけるために「リバウンド!リバウンド!」と言い続けることである。リバウンドに強くなるための第1条件は、身長やジャンプ力ではない。「リバウンドを取ってやる」という「強烈な意欲」である。選手は気持ち次第で誰でもデニス・ロッドマンになれる。